

受験のカラクリが見える!

模試データ 活用法



壺溪塾講師 上野雄一郎
(うえの・ゆういちろう)

熊本県出身。県内中堅進学校を卒業後、「日本で2番目に生まれた予備校」[壺溪塾(こけいじゅく)]を経て、東京大学理科1類に入学、同工学部を卒業。現在、「母校」[壺溪塾]で数学・物理の専任講師として活躍中。目線を受験生に合わせるため自らも毎年センター試験を全科目受験(900点満点で毎回9割超えを達成)、あるいは夜遅くまで何時間も生徒に付き合うなど、クールな見た目とは対照的な熱い魂を持つ男。

URL: <http://www.kokei.ac.jp>
E-mail: info@kokei.ac.jp



模試はやる気 の原動力だ!

はじめまして、こんにちは。1年後に大学受験を控えた皆さんは、高3生になると模試(模擬試験)を受ける機会が増えるよね。

模試はその時点での学力を測る目安であって、できなかった問題を復習することに意味があるのであり、BとかCとか、判定に一喜一憂するのは良くないといわれているけれど、私は判定を気にするのは決して悪いことじゃないと思っている。それによってやる気が出てくるだろうからね。

だから今回は、「模試データ活用法」について話したいと思う。私は数学の講師なので特に数学を例に出すけど、他の教科・科目にも応用の利くことなので、適宜、自分の受験する教科・科目に置き換えて読んでほしい。



狙い目はどこだ?

右上の図は、平成10年の秋に行われた駿台全国模試の理系数学のデータだ。

● 図1 (一部、大問番号を変更)

大問	配点	全体平均	現役平均	浪人平均	標準偏差
①	40	26.3	26.4	26.3	9.3
②	40	18.8	19.5	18.3	9.5
③	40	16.1	15.2	16.7	12.6
④	40	20.5	20.5	20.4	9.1
⑤	40	2.8	2.5	2.9	7.4

ちょっと古い? それもそのはず、実は私が受験生のときのものなんだ。実データじゃないと説得力がないからね。ちょっと実家から引っ張り出してきた(笑)。

これを見て何か気づくかな? 明らかに、他とは違う問題が1問あるよね。

そう、大問5の平均点がとても低いということだ。40点満点に対して、平均がたったの2.8点! 駿台の全国模試は受験者層がハイレベルなことで有名なんだけど、その彼らでさえ平均点が1割を切ってしまうって、いったいどんな問題だ?

「こんな難しい問題は本番の試験では解かなくていい。他の問題を確実に解けば合格する」なんて言う指導者もいるかもしれない。

確かにこの問題が解けなくても致命傷にはならないけど、他の問題が解ける保証だってないよね?

模試データ 活用法

それに、(試験後ではなく) **試験中に的確な難易度の判断ができる受験生なんて、そうそういない**んだよね。そもそもそんなことができる受験生っていうのは、こんな他の受験生ができない問題でもスラスラ解けてしまう。

で、実際、私の試験結果はどうだったかという、この大問5、満点でした。

「なんだよ。ただの自慢かよ」

いやいや、別に私が特別に頭がいいとか、数学が得意だったとかいうわけではなく、本当はやさしい問題だったんだ。

「ウソをつけ! 全国平均が1割もない問題がやさしいものか!」

なんて怒るかもしれないけど、これは本当の話。論理的な難しさなどまったくない。計算も他の問題と比べてそれほど必要ない。

実際のところ、**こういう問題こそ狙い目**なんだ。それにはちゃんとした理由がある。それはあとで説明しよう。

もうひとつ、例を出しておく。私自身のデータだけだと、

「アンタいま数学の先生だし、やっぱり他の人より数学得意だったんでしょ?」

とか、言われちゃうからね(笑)。

実際に私が予備校『壺溪塾(こけいじゅく)』で担任指導をした生徒3人にご登場いただく。E君とK君とM君。いずれも、平成18年の入試で東京大の理系類に入学している。

図2は、平成17年秋に行われた東大実戦模試(駿台)の理系数学のデータだ。やっぱり、ちょっとおかしなところがあるね?

そう、大問2、平均点が1.6。これも満点の1割を切っている。東大の理系受験者という、単純に言って全国でいちばん理

● 図2

大問	配点	平均	E君	K君	M君
1	20	8.9	20	0	10
2	20	1.6	20	20	20
3	20	7.4	12	8	0
4	20	6.9	8	10	0
5	20	2.6	8	0	2
6	20	3.1	8	0	0

数科目ができる集団なんだけれど、彼らの平均が1割もないなんて、普通だったら「どれだけ難しい問題だよ!」ってなるよね。

でも、E君・K君・M君3人とも解けている。別にものすごく時間をかけたわけではない。3人とも口を揃えて「この問題が一番カンタンだった」という。30分程度で解けたらしい。ちなみに、東大理系数学は、6問出題で150分与えられる。4~5割程度で合格点に届くから、30分で1問解けるなら、かなりいいペースだ。この模試では、ほかの問題がイマイチだった人もいるけど、最終的に3人とも合格しているからね。

それでは、どうしてこんなことになったのかというと、それは、私がこのタイプの問題を解くように学生に指導しているからなんだ。

どう? ちょっとは私のいうことを信じてみる気になった(笑)?



偏差値とはいったい何だ?

随分もったいぶったけど(笑)、じゃあ、そろそろタネ明かしに移るとしよう。

と言いたいところなんだけど、実は、それを理解してもらうには、ちょっと前提となる話がある。まずはそれから聞いてもら

おう。

君たち、「偏差値」って知ってる?

「ああ知ってるよ、平均が50になるやつでしょ。」

でも「平均が50」くらいじゃ、何も知らないのと一緒にだ。

実は、偏差値とは、以下の図のような式で求められる。

完全にその試験の度数分布で決まるわけだ。別に誰かが「この人はこの点数だからこのくらいの偏差値かな〜」なんて決めてるわけじゃないからね。

$$\text{偏差値} = \frac{\text{得点} - \text{平均値}}{\text{標準偏差} \times \frac{1}{10}} + 50$$

得点=平均点なら偏差値50になるよう定義されている

偏差値を1上げるのに必要な点数

さて、この式を見てみると、自分の得点が平均点とまったく同じだと偏差値50というのはよくわかるね。また、偏差値が100を越えたり、あるいはマイナスにもなり得るといことも見てとれる。別に0から100までしかなくて、その真ん中が50、というわけではないからね。つまり、50という数値に本質の意味はないわけだ。

受験生レベルでよくわからないのが標準偏差というヤツだろうけど、とりあえずここでは、分数部分の分母つまり**標準偏差の10分の1が“偏差値を1上げるのに必要な点数”**だということがわかってもらえるといいよ。

これも試験の度数分布から算出されるもので誰かが適当に決めてるわけじゃないからね。



偏差値マジックにだまされるな!

さて、以上の説明から、ちまたでよく見かける“偏差値ランキング表”などというものがほとんど意味のないものであることがわかるだろう。なぜなら、**偏差値とはその時々で決まるもの**だからだ。「△△模試では〇〇大学に合格可能性のある偏差値は〜だった」みたいな言い方だったら、まだマシだけどね。

また、模試などで判定に用いられる“偏差値平均”にもだまされてはイケナイ。

ふつう、100点満点の記述式の試験では、英語、数学、国語の標準偏差はそれぞれ大体、「英語15、数学20、国語10」くらいになる。これと先の偏差値の定義式を踏まえて、次のA、Bの2人について、それぞれ“平均との点差”を計算してみよう。

簡単にするため、2人の英語の点数は同じく平均としよう。

A: 偏差値/英語50、数学70、国語44

(数学、国語の平均57)

$$\text{平均との差} / (50 - 50) \times 1.5 + (70 - 50) \times 2.0 + (44 - 50) \times 1.0 = +34$$

B: 偏差値/英語50、数学60、国語60

(数学、国語の平均60)

$$\text{平均との差} / (50 - 50) \times 1.5 + (60 - 50) \times 2.0 + (60 - 50) \times 1.0 = +30$$

するとどうだろう? おかしなことがおきているのに気づくはずだ。偏差値の平均はBの方が高いのに、平均との点差はAの方が高いのだ。

ほとんどの場合、大学が合否を決めるのに用いるのは点数であって、偏差値ではない。

模試データ 活用法

つまりこの例の場合、Aの方がBよりも合格しやすいということになる。

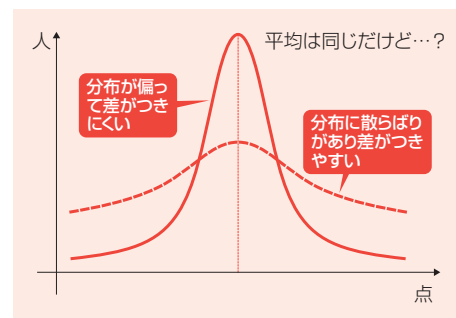
よく「苦手科目がなくバランスが良い方が合格する」という言い方をするようだけど、それは迷信であることがわかるね。あくまでも大学・学部・学科によるんだよ。

偏差値平均というやつは、本当に大まかなことしか判断できないということに注意してほしい。

勝負を決める 教科・科目はどれ？

高校数学の範囲で標準偏差の定義式は書けるけれど（現行では数学Cの選択分野）、ここでは細かいことは考えずに、“差のつきやすさ”を表す数値、だと解釈してくれるといい。

たとえば以下の図は、得点分布を表すグラフなんだけど、実線の場合も点線の場合も平均は同じ。



でも、実線の方は平均点付近に分布が偏っていてあまり差がついていない。一方、点線の方は0点から満点まで散らばりがあり差がついている。

このような“差のつきやすさ”の度合いを表す数値が“標準偏差”だ。先のAとB

の例では、**数学は国語の倍近く“差がつきやすい”**ということになるわけだね。

単位は対象となるものと同じ、すなわち今は得点について考えているので標準偏差の単位は“点”になる。これが意味するのは、“**満点が倍になると標準偏差も倍**”のように単純な比例計算ができるということだ。

たとえば、次の2つの大学・学部の個別試験の配点をみてみよう。

- 一橋大-商
英語250、国語125、数学250、地歴・公民125
- 京都大-理
英語150、国語100、数学200、理科200

いずれも、数学の配点が国語の倍ある。もともと配点と同じ場合だと差のつきやすさが倍なんだから、**この場合、数学は国語の4倍近く差がつきやすい**ということになる。

となると、これらの大学を受験する場合、どの科目に力を入れるべきか、自ずとわかるというものだ。

ちなみに、地歴・公民と理科の標準偏差については、配点と同じだと仮定すると、地歴・公民は英語と同じくらい、理科は英語と数学の間、であることが多い。

もちろん、国語の勉強をおろそかにしていいわけじゃない。センター試験だと、その出題方法の特殊性から差がつきやすくなっているし、古文・漢文はある意味“外国語”だから、勉強する分だけできるようになる。

だけど、だいたいセンター試験問題で7～8割くらいコンスタントに取れるようになると、それ以上はあまり意味がなくなる（特に現代文）。そのくらいのレベルになる

と、記述式の国語の試験ではダンゴ状態になるんだ。

最近、大学の個別試験で理系受験者に国語の試験を課す大学・学部が増えつつある。上で述べたようなことを何も知らない受験生には、

「俺、国語ニガテだから△△大学受験するのやめる～」

なんて逃げ出しちゃう人もいるだろうけど、これを読んでくれている皆さんは、逆に、そこが狙い目だとわかるよね。

「このタイプの 問題を解け！」

さあ、これで図1・2の説明に戻れる！ここまで読んでくれた人たちなら、もうわかるよね。そう、標準偏差すなわち差のつきやすさに注目するんだ。

でも、図1だと、大問5より、ほかの問題の方が標準偏差が大きいじゃないかって？確かにそう、他の問題の方が差がつきやすいんだけど、大問5の場合、何が違うかっていうと、**平均点の低さに対して標準偏差が大きすぎる**んだ。

先ほど、平均も標準偏差も単位は“点”だという話をしたよね。実際に（標準偏差）÷（平均点）を計算してみるとよくわかる。

つまりこの問題は、平均が低い割には、けっこう差がついている、All or Nothing、満点が0点か、みたいな、そんな問題だったというわけだ。

そんな問題が、本当の難問のわけがない。知っているか知らないか、やったこと・意識したことがあるかないか、ただそれだけの違いなんだよ。

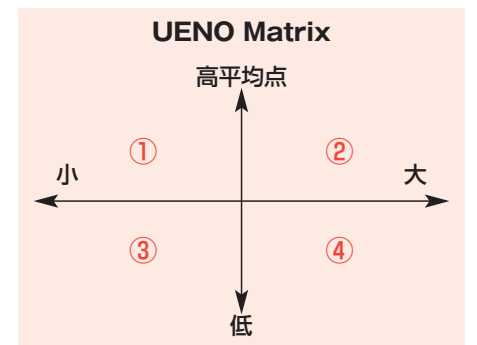
私はたまたまそのときスラスラ解けちゃったものだから、それに気づいてしまった。それが今の受験指導に役立っているだけけどね。

その指導の結果が図2だ。このときは各大問ごとの標準偏差データはなかったんだけど、私は自分の受験生時代にいろんな模試のデータを集めて、どの類の問題でこのようなことが起こるのかを検証していたんだ。

そして、そのような問題を“狙い撃ち”するように指導している、というわけ。

どう？ これではじめに出したデータの意味がわかったでしょ？

さあ、これまでのことをまとめてみよう。以下の図において、縦軸が平均、横軸が標準偏差だ。



まだ誰もこういったことを提唱していないので、私の名前を冠してる（笑）。どのエリアに属すると、どんな問題なのか、一つひとつ見ていこう。

まずは①。平均点が高く標準偏差が小さいということは、**やさしすぎて差がつかない**、ってことだね。このエリアに属する問題を取りこぼしているようじゃ、合格はおぼつかないよ。

次に②。平均点が高く標準偏差が大き

い、つまり差がつきやすい。そんなことってあるの？って思うかもしれないね。

実はこのエリアに属する問題は、平均点が高いといっても大体4～5割くらいなんだ。6～7割となると大体①で、平均を下げているのはミスやはじめからその大学はキツめな人。**多くの場合は②で勝負が決まる**。その受験者層での選抜試験に適した問題ともいえるね。

そして③。平均が低くて標準偏差が小さい、これこそが**本当の難問**、ってわけだ。本番で解けるに越したことはないんだけど、解けなくてもまったく問題ない。どちらかというと、手を出さない方がよいということになる。ここで時間をロスして①や②の問題が解けなかったりするのはいないからね。だから、どんな問題がこのエリアに入ってくるのかを調べておくことが重要になる。

それから最後に残った④。ここが今日のメインだね。平均点が低くて標準偏差が大きい、これは、**多くの受験生が苦手しているが実はそれほど難しくない**、ってことだ。みんな敬遠しがちなんだけど、単なる慣れだったり、ちょっとしたことで、すぐに解けるようになるような問題。数字で例を挙げると、自分で変数・座標を設定する問題、非回転体の体積、曲線の通過領域、…などで、数学の場合、④に属するのは、概して、単なるテクニック問題というよりは、本質を突く問題のように感じるかな。数学以外の教科・科目については、自分で模試のデータを見ながら検証してみてね。

④の問題が解けると合格がグッと近づくことになるよ。なんてたって、平均点が1割未満とかなら、**他の受験生にほぼ丸々1問分の差をつける**ことになるからね。もし①や②の問題でミスをして、十分に取

り返しがつくしね。①や②の問題は普通に勉強していれば自然と解けるようになるものだから、あとは④の問題をちょっとだけ意識して取り組めば怖いものなし！ 頑張るって！



私の合格体験から

実際、私自身は東京大学理科一類を受験したとき、6問の出題に対し、**2問完答、残りの4問はほとんど白紙で提出**して合格したんだ。その2問が、④に属する問題だったんだね。2問解いたところで時間切れだったんだけど、他の問題もそれほどやさしくなさそうだったので平均は超えたと思いき、この2問を解けたことで、他の問題は白紙でも、まったく不安はなかった。

答案回収の際、隣の人の答案をチラッと見たんだけど、その人は答案用紙いっぱいビッシリ何かを書いているの。

でも、私が解いた問題の答えと違っていたので、「ああ、コイツ落ちたな」と思った(笑)。

で、やっぱりその人は不合格だった。

興味のある人は、平成12年・前期の大問1と大問6だから、挑戦してみるといいよ。数学の得意な人だと簡単に解けちゃって、

「本当にこれで差がつくの？」

なんて思っちゃうかもしれないけど、事実、これで合格したんだ。模試データを綿密に検証したことによる勝利だね。

さあ、みんなも、模試データとにらめっこしながら、自分自身の合格作戦で栄光をつかめ！

Good luck !

fight!! 浪人生応援特別企画

来春こそ第一志望の大学・学部合格することを目標に、勉強に取り組んでいる浪人生諸君！秋以降は現役生の追い上げもあり、焦りを感じるかもしれないが、予備校の先生や浪人を経験した先輩たちからのメッセージを読んで、力強く前進していこう。

ガンバレ！ 浪人生

応援メッセージ

合格最低点さえ超えれば君の勝ち！
模試で判明した弱点の補強が生命線



熊本壱溪塾学園
やずみ かつひろ
矢住 勝大先生

熊本県立熊本高校卒。現役時には熊本商科大(現熊本学園大)に不合格。熊本壱溪塾学園で1年間の浪人を経て、大阪大・慶應義塾大・防衛大などに合格。大阪大法学部卒業後、和光経済研究所(現新光総合研究所)研究員などを経て、母校の専任講師に就任。地理・公民・簿記会計・社会科学系小論文などを担当。わが国に約400名しかいない国會議員政策担当秘書資格試験最終合格者のなかの一人。日本経済学教育協会が主催する経済学検定(ERE)を現在3連覇中。

浪人は飛躍のための好機！今の“非常事態”は“素晴らしい日々”に変わる、否、変えられる！

君たちは今、大学生でも社会人でもない不安定な“無所属”であり、“非常事態”に直面している。しかし、1年間の浪人を経験した者として断言しよう。浪人時代は“己を高める貴重な日々”である、と。

その大学・学部を目指す理由を明確にすれば
とてつもない成績の向上も夢じゃない！

私は高3の夏まで「専門学校で職業関連の技能を学んでアルバイトしながら、プロ麻雀で全国制覇！」と本気で考え、ほとんど勉強していなかった。

しかし、漫画家の手塚治虫が曾祖父の良庵を主人公に描いた『陽だまりの樹』を読んで、幕末の蘭学者・緒方洪庵が設立した〔適塾〕の存在と大村益次郎や福澤諭吉ら卒業生の活躍を知り、大阪市内の遺構を訪ね、その存在感に圧倒された。その際、〔適塾〕が大阪大に、福澤諭吉が〔適塾〕をモデルに創設した塾が慶應義塾大になったことも知った。

そして夏休み明けには「どんな人生を歩もうと、法律と政治と経済はついて回るから勉強しよう」と

決意した。さらに、「適塾出身者と同じ勉強量を積み上げ、大阪大や慶應義塾大などの難関大で学び、かつ卒業後もこれらの領域の勉強を続けて初めて、国家の中核で政策形成に携わったり、金融機関で大金を動かしたり、教育者として発言できるんだぞ」と勝手に思い込み、自分に言い聞かせていた。まったく実力が伴わず、浪人を余儀なくされたのだが..。

しかし、浪人してからは幕末の適塾生をモデルに真面目に勉強したことで、大阪大にも慶應義塾大にも合格することができた。

だからこそ君たちに言いたい。周囲からいろいろ言われても気にせず、何が何でも志望する大学・学部に入りたい理由を明確に持ち続けたうえで、そのために必要なことを着実に実行できれば、来春きつと、とてつもない学力の向上を達成して、夢を実現できているはずだと。

配点と最低点を頭に叩き込み、過去問をやれ！
どの科目から何点ずつ確保するのかを考えよう

ここで君たちに問いたい。
志望校で課される科目と配点を知っているか？
合格最低点はわかっているか？
そのハードルを飛び越えるために、どの科目から何点ずつ確保するか明確な目標を設定しているか？
実際に志望校の過去問に挑戦して、現時点で何点取れるか自分自身の実力を把握できているか？

ホンモノの受験生なら、～にYesと答えられるはず。大切なのは、目標である と現実である の差を調べ、それを埋めるために、どの科目で何点ずつ引き上げるか計画を立て、実行することだ。その意味で、現役の頃のように“実力がついてから過去問を始めよう”と悠長なことを言っている暇はない。現役時より基礎学力は高まっているはずだから、積極的に過去問演習・分析に取り組もう。そうすれば“この国立大の2次試験の数学は4問中2問は微積と確率から”とか“この私立大の世界史は西洋史のうち近現代史の比重大”などという各大学の傾向が見えてくる。過去問の演習・分析を進めれば重

点を置いて攻略すべき分野・領域を把握でき、効果的な学習を進めることにもつながるはずだ。

現役生の追い上げで志望校判定の悪化は不可避
誤答から判明する弱点の補強にこそ尽力せよ

夏以降は部活動などに明け暮れていた現役生が本格的に勉強を始め、浪人生との差をつめて来る。このため、5～7月頃の模試で志望校に対してA～B判定だった浪人生が、9～11月頃にはC～D判定に後退することもありうる。しかし、ここでクヨクヨしている場合ではない。そんな暇があったら、どの問題で得点を落としたのか詳細に分析すべきだ。

模試の意義は、志望校に対する合格可能性を判定できるだけでなく、自分の弱点を浮き彫りにできる点にもある。そもそも模試で得点できなかった領域とは“今日が試験の本番だったら、君はこの領域で得点を落としたんだよ”と天が教えてくれるメッセージなのだ。そして、たとえば、C判定に終わった自分の得点とA判定を獲得するために必要だった得点とのギャップを調べて“この問題さえ解ければA判定だったのか！”という感触をつかめることも模試の活用法のひとつだ。だから、決して“週末の模試は準備が間に合わないから受験しないでおう”みたいな弱気なことを口にしてはならない。むしろ模試で痛い目にあって欲しい。模試で間違えた箇所こそ、君を勝利へと導く“宝の山”なのだから。

数十年後の君のために残り6か月、死力を尽くせ

このような努力を積み上げていけば、6か月後の入試本番で、現役時に比べて学力的にも精神的にも格段に強くなっている自分自身に驚き、志望校合格の栄冠を手に行けるはずだ。数年後、数十年後、君は自分自身がなりたい自分になれているだろうか？もし、夢を実現できているのであれば、数十年後の君は、きっと現在の君に感謝するだろう。

この一年をそのような一年にしようじゃないか。

涙と笑いの浪人体験記



東京大学
理科二類
よしもと すすむ
吉本 進さん
熊本県・真和高校 2005年卒
熊本壺溪塾学園 東大・京大理系コース

基礎を大事にしなが 地道な勉強を積み重ね 合格力を身につける

解説に頼ることなく、「自分の 頭で考える」癖をつける

模試の判定を鵜呑みにし、少し良い判定が出ると安心して勉強を怠る。現役時代の失敗は、受験に対する認識の甘さ、これに尽きます。

そこで浪人時代は、壺溪塾での禅の時間などを通して、精神統一を図り、受験への意識を変えることから始めました。そして、自分に合った信頼できる先生からのアドバイスに基づき、「自分の頭で考える」癖をつける勉強を徹底しました。解説に頼ることなく答えが出るまで自力で問題を解くように心がけること。これは正直、とてもきつかったです。しかし、現役生と比較して自由な時間のある浪人生にしかできない、成績を上げるのに確実な方法だと思います。試験中に頼りになるのは解説などではなく自分の頭だけなのですから。

自分を信じてまじめに勉強を 続ければ、成績は必ず伸びる

学習で気をつけたのは「基礎を大事にする」ということです。すべての応用・発展問題は基礎から始まります。基礎だけでは頼りないように思えるかもしれませんが、実際に自分の結果や友人の結果、予備校の先生の話聞いていても、解ける問題（つまり基礎ができていればできる問題）を確実に解いた人が合格しているのは事実だからです。

確かに今は辛いかもしれませんが、しかし、自分の勉強量を信じてください。まじめに勉強すれば成績は伸びる、これは紛れもない真実です。そして忘れてならないのは自分の力を客観視できる「目」をもつことです。「自信がなさ過ぎてもあり過ぎても良くない」というのは恩師の言葉です。皆さんが来春、見事な合格の桜を咲かせることを願っています。

現役時代

受験校	学部	合否
防衛大学校		
九州大	薬・前	×
熊本大	薬・後	×
東京理科大	薬・センター利用	×

浪人時代

受験校	学部	合否
東京大	理科二類・前(1浪目)	×
大阪大	薬・後(1浪目)	×
東京大	理科二類・前(2浪目)	
慶應義塾大	理工(2浪目)	×



京都大学
経済学部
やつなみ さとる
八浪 暁さん
熊本県立済々黴高校 2006年卒
熊本壺溪塾学園 東大・京大文系コース

演習を何度も繰り返し 問題形式を叩き込んで 精神面の強化を図る

自分を追い込みすぎず焦らないよう 落ち着いて試験に臨む訓練をする

私は現役時の受験を通して、メンタリティがどれほど結果に影響するか痛感しました。理系から文転したこともあり、なんとしても数学で点を稼ぎたい、数学で稼がなければいけないということを意識しすぎたせいで、肝心の数学で訳の分からない方針をとったり、簡単な問題さえも落としてしまったのです。

そのため、浪人時代の模試では、とにかく心のゆとりを失わないように気をつけました。そわそわした気持ちのまま、もともと記憶にあるはずのことを思い出せなくなっては本末転倒だからです。自分を追い込みすぎず、可能な限り合格確率を100%に近づけていければいいと楽に考えるようにしました。絶対に模試で合格可能性100%なんて出ませんしね。

英語と数学を中心に演習を繰り返し 問題形式になれることで、実力アップ

京都大の問題形式に慣れるため、特に差がつかやすいと思われる英語と数学に力を入れ、時間も本番

同様に区切って何度も演習を繰り返しました。その際、添削を快く引き受けてくださる先生方がいてくれたことは大変心強かったです。

また、現役時代に突き詰める余裕がなかった地理・現社などの学習にもじっくり取り組みました。受験対策のための勉強でしたが、後々に役立つ教養のようなものも高まったかもしれません。

勉強に対して精一杯の努力を続け 冷静さを保つように心がける

勉強の量・質と模試成績の相関関係については、そう簡単に掴めるものではないと思います。だからもし勉強のやり方・量・教科バランスなどを精一杯より効率の良いものにしようと努力・工夫をしているなら、そのまま続けてほしいです。

試験中は問題を解くことに没頭しなければなりません。問題に入り込みすぎるのは絶対に良くありません。あくまで私の感覚としてですが、問題用紙を遠くから眺めているようなイメージでやると冷静さ・客観性を失わず、落ち着いて解ける感じがします。よかったら参考にしてみてください。

現役時代

受験校	学部	合否
京都大	経済・前	×
京都大	経済・後	×

浪人時代

受験校	学部	合否
京都大	経済・前	
慶應義塾大	法・センター利用	
早稲田大	商・センター利用	
早稲田大	政経・センター利用	×